

第七章 結論

ここでは、本研究に関する結論をまとめて考察を行った。

(1)異筆の発見と先行研究との関連

本研究は、『法華義疏』に見られる改訂、補筆、貼紙の箇所に着目し、これまで論考が加えられてこなかった新たな異筆の発見とそれに関する論証を行った。

本研究が異筆の可能性を見出したのは、『法華義疏』巻四の第六紙である。巻四第六紙は「白色紙」であり、本文とは紙色を異にしている。先行研究を調査したところ、花山信勝氏、石田茂作氏に、時を隔てた「本人の清書」とする説があった。石田茂作氏は「本人の清書」を根拠として紙の時代策定を行い、「白色紙」もまた飛鳥時代のものである、としていた。

本研究の論証にあたっては、まず平成八年、東京国立博物館における展示の際に得られた私見を石田茂作氏の論説と照合し、論述することで、異筆の可能性を示唆した。更に、本研究における異筆可能性の意義を明確にするために、仮説を立て第四章に明示した。

西川寧氏には、『法華義疏』の書風に関する詳細な時代策定の論考がある。西川氏は、『法華義疏』の書風を「別字」と「様式」の両面から分析し、そこから隋文化圏の影響を指摘している。他の先行研究が時代様式の印象を大略的に述べているのに対し、特筆すべき論考である。そこで、西川氏の分析結果を応用し、巻四第六紙に照合させた。その結果、同一の結論が得られず、異質の要素が含まれていることが判明した。

西川氏の論考は巻一のみに限定しての分析である。四巻全体を対象にしてはいないため、異なる結果が得られることも有り得る。そ

ここで、本研究と西川寧氏の分析の違いを仮説として提示し、本研究における書風分析の立脚点とした。

本研究は、「法華義疏画像データベース」を構築し、研究環境に対する整備を行った。第六章の書風分析においては、「法華義疏画像データベース」を運用し、巻四第六紙の文字、154種類について分析を行った。比較対象は、巻一と巻四である。巻四第六紙には、本文の筆者とは異なる筆蹟が看取されたため、その内容を以下の四項目に分類し、論証を行った。

- (1) 字形の違うもの
- (2) 様式の違うもの
- (3) 筆法により線質の違うもの
- (4) 筆法により様式の違うもの

第六章における論述は、データベース収録の画像資料を基に進められた。本研究では、上述のような項目に基づき、巻四第六紙を『法華義疏』に見られる異筆であると断定した。

異筆であるため、西川寧氏の説と違戾する事象が得られたとしても、同氏の結論を覆すものではなく、互いの説は矛盾しないということが立証された。そればかりでなく、第四章において仮説を設定するために行った巻一の調査結果は、一例の例外もなく、西川寧氏の説と一致していた。従って、仮説を明示するために行った巻一との比較は、西川寧氏の慧眼を証左するものとなった。

この結果、本研究では「白色紙」であるにもかかわらず、書風の類似点から巻四第六紙を「本人の清書」としている花山信勝氏と石田茂作氏の説には、首肯できない。巻四第六紙は異筆であり、第六章の結果から、「白色紙」は本人の筆蹟ではない異筆への傍証であ

ることが浮き彫りとなった。

また、第六章 第三節においては『寿量品』の分析を行い、特に、「示滅非實滅」又は「示滅非滅」の文を含む九箇所の修正、貼紙に関し、詳細な分析を行った。この部分については、花山信勝氏に「後人加筆の疑義」とする論考がある。列挙されたものと照合し、九箇所の内、六箇所を同筆、一箇所を不明と判断した。

九箇所の内、①巻四第十九紙の貼紙⑨巻四第二十三紙の貼紙と③巻四第二十紙の補筆の三箇所は異筆であると断定した。また①と⑨には類似点が見られるため、更に検討を行った結果、筆者以外の別人が①と⑨の二箇所に修正を加えたことが判明した。双方共に「白色紙」の貼紙であり、花山信勝氏と石田茂作氏に論述が見られる。

「白色紙」であることはやはり、異筆への傍証であることが明らかとなった。本研究の分析結果は、先行研究の花山信勝氏の説、「後人加筆の疑義」を「断定」と改めるものである。

本研究では、巻一及び巻四を比較対象に『法華義疏』に見られる異筆分類を行い、その結果、巻四第六紙、巻四第十九紙の貼紙、巻四第二十紙の補筆、巻四第二十三紙の貼紙を異筆として新たに分明した。

(2)書風分析との関連から想定される『法華義疏』解釈に関する疑念

南北朝から隋は、仏典解釈において大きな変化が生じた時代である。仏の「常住」と衆生の「仏性」に関して、多くの議論が重ねられた。

南北朝においては、経典中に「仏性」が明示される『涅槃経』を窮極の教えであるとしていた。『涅槃経』は、入滅に至る直前の説法であるが故に、最終の説法において、最も優れた教えが説かれたと考えられ、釈尊の説法は順序、次第を追って徐々に深まっていくとする五時教判の四想が盛行していた。

『法華義疏』の筆者が執筆にあたり、その多くを引挙した法雲の『法華義記』もまた、五時教判の考え方を踏襲していたものと四われる。

隋に入ると、智顛、吉蔵等によって『法華経』が大いに高揚され、南北朝においてそれまで『涅槃経』への橋渡し、前方便であると解釈されてきた『法華経』が仏典の中の最勝であると理解された。五時教判の四想は痛烈な批判を受け、その際、法雲の説は常に引用され、判断材料として批判的となった。

このような歴史的推移の中にあって、『法華義疏』の筆者はどのような見識を持ち、中釈を行ったのか。『法華義疏』における『法華経』解釈の四想を明らかにするため、先行研究においては、引用される諸疏の系統と配分を綿密に調査することが行われた。

『法華義疏』が法雲の『法華義記』を参照し、中釈の3分の2を依拠していることは、花山信勝氏の論考に明らかである。花山信勝氏はこの他、「他疏」と呼ばれるものの中に、吉蔵疏に類するものがあると論じているが、平井俊榮氏は照合を行い、吉蔵疏であると

断定している。平井氏は『法華義疏』の筆者が、吉蔵という隋王朝の時代の解釈を踏まえ、そこから南北朝の仏典解釈に溯ったとする自説を述べている。

『法華義疏』を解釈した時、『法師品』の「法華最第一」の文を以って、その中心思想であるとする説が、花山信勝氏、望月一憲氏、石田瑞麿氏の三氏に見られる。論証の経緯と解釈の内容は、三者各様であり差異が見られる。また、平井宥慶氏は、『法師品』の「萬善同歸」を中心思想であるとしている。花山氏は、『法華義疏』が、南北朝の註釈書に拠りながら、「五時教判」の『涅槃經』第一の解釈に拘泥せず、「法華最第一」の解釈を持ち得ていたのは、筆者の叡智の賜物であったとし、すぐ後の時代に隆盛を極めた天台教学に先んじる形での『法華經』理解であったと称賛している。

「法華最第一」、「萬善同歸」は共に『法華義疏』の巻四第六紙に存在している。南北朝から隋にかけての論議項目であると共に、『法華義疏』解釈の中心部分である。

巻四第六紙は花山信勝氏、石田茂作氏に「本人の清書」とする説があり、これまでは、考証のための判断基準となるべき箇所が、同一筆者のものとされてきた。

しかし、巻四第六紙は本研究において異筆であると判断しており、第六章において4項目に分け、異筆に関する論証を行った。

本研究の仮説が立証されたことにより、中心思想として取り上げられる部分に別人の筆跡が存在しているということになる。巻四第六紙は異筆であるため、「法華最第一」を含む前後の文言は、筆者の解釈ではない可能性も否定できなくなる。もちろん、改訂、貼紙等は、巻物の破損など、不測の事態が起ったことに因るやむを得な

い処置であるとも考えられるため、別人の筆蹟であるが故に、即応、書かれた内容が改竄されていると結論付けるわけにはいかない。しかし、別人の筆蹟であるということを考慮に入れぬまま『法華義疏』の中心思想に据えておくことは、今後不可能であろう。本研究では、『法華義疏』、卷四第六紙の貼紙を異筆であると判断し、今後の『法華義疏』解釈に新たな論点を提示した。本研究の異筆判断は、書学においてばかりでなく、『法華義疏』の内容解釈に影響を与える重要項目である。

これは、第一章で論述した書学における新たな研究方法論の模索に他ならない。文字を媒体として派生する様々な機能を解析し、関連性の中にそれを再構築するという研究の手法である。再構築することで時代相の一側面を示し、それを以って様式論とする。

本研究は、『法華義疏』卷四第六紙の異筆判断を通し、書風分析と内容解釈との相互関連を具体的に提示した。関連性の中に書風分析の意義を見出し、書学の重要性を浮き彫りにするという、新たな様式論の提示に相当する。

(3)新たな方法論の確立

本研究では、『法華義疏』の研究を通して書風分析と内容解釈との関連を具体的に明らかにし、相関関係の構造の中で様式を論じていく新たな方法論の模索を行った。文字を媒体として存在する様々な機能、その相互の因果関係をより明確にするためには、関連を構造として捉え、更にそれを論文の形式として反映させる必要がある。

第三章で述べたように、本研究は何らかの概念が基底にあり、それを敷衍させる形で構成されたものではないため、具体的対象を基にした具体的手順の中に方法論模索の意義内容が含まれている。

「異筆の可能性」から3つの研究アプローチが派生し、その不可分な関連構造を論文形式に定着させるため、「仮説」を立てて、「立証」するという、書学においてあまり行われていない論文形式を採用したが、本研究におけるこのような手法、異筆判断と内容解釈との関連を明らかにし、仮説立証型の論文構成として定着させるまでに導いたのは、『法華義疏』に見られる「果」の文字である。

「果」の文字は、第四章の仮説の設定、第五章の解釈の重要課題、第六章の異筆の断定、いずれの場面においても重要な役割を示している。本研究の中核であり、骨格を支えたと言っても過言ではない。

まず、第四章においては、書風に関する先行研究と本研究との違いを明確にする役割を果たした。「果」は、西川寧氏が隋文化圏であると判断する時代策定の根拠であり、巻一では「田」と「木」に上下に分けて書いているが、巻四第六紙では、上下に分けず、中心線を長く書いているものが十一例中、三例見られる。西川寧氏の分析結果に違背するこうした内容をまとめ、仮説として設定した。

また、第六章においては、異筆判断の根拠となり、判断材料の一

つとなる役割を果たした。

第四章で述べたように、巻一では、上下に分け、「田」と「木」にしているが、巻四第六紙では、上下に分けず、中心線を長く書いているものが十一例中、三例見られ、字形が異なっている。西川寧氏の説と比較するため、第四章では巻一を対象にした。しかし、第六章において巻四を対象範囲に加えても、結果はやはり変わらなかった。巻一及び巻四では、一例の例外なく、「田」と「木」に分けて書いており、書風に一貫性が見られる。巻四第六紙は、『法華義疏』において特異な存在であると言わざるを得ない。「果」の分析結果は、(1)字形の違うもの、に分類し、異筆断定の根拠の一つとした。

第五章においては、『法華義疏』の筆者が受持していた『法華経』解釈の真意と、諸疏との関連を探る上において、重要な意味を有していることを示す役割を果たした。

仏典解釈において「果」とは「仏果」である。無量の「仏果」である仏の「常住」が『法華経』には説かれているのか否か。南北朝の五時教判においては、仏の「常住」と衆生の「仏性」を共に否とし、隋においては是とする。巻四第六紙は『法師品』の註釈部分であり、「高原鑿水の譬」を含む。隋の吉蔵が「仏性の水」と解している所、『法華義疏』においては、「水」を「寿量の果」としている。そして、五時教判に拠りながら、「前に会し、後を開く」故に、「法華最第一」としているのである。『法華義疏』の筆者は南北朝の五時教判に則っていたのか、それとも隋の諸師に先んじて『法華経』を第一としたのか、先行研究にて解釈が分かれるところである。先行研究でこれを解釈する場合、「法華最第一」、「萬善同帰」、「其

心決定知水必近」等、『法師品』卷四第六紙に見られる文を抜粋して論述の根拠としている。これまでは卷四第六紙を「本人の清書」としているため、常に論拠として取り上げられてきているが、しかし、本研究では異筆であると判断している。『法華義疏』解釈の重要部分に異筆が存在することになり、解釈の更なる検討が待たれる。このような関連の内容をまとめ、重要事項として第五章に提示したのである。

このように、本研究においては「果」の文字が、仮説の設定、解釈の重要部分、異筆断定のすべての側面において、重要な役割を果たした。第三章で述べた、具体的対象を基にした方法論模索とは、このような内容のことを指している。

遺品の解析を相関関係の中で行うのは、関連性の中で遺品が形を為したからに他ならない。第一章において述べた、歴史的必然性の中で結実する様々な様相について分析し、内在する情報を解析することで関連性の構造を明らかにするという、本研究の研究方法論の確立がここに示されている。

(4)研究環境整備としてのデータベースシステムの運用評価

本研究は、『法華義疏』の書風分析を行うにあたり、より円滑な資料運用を実現するため、「法華義疏画像データベース」の構築を行い、研究環境を整備した。情報処理技術の定着が見られない分野においての、画像データ化及びデータベースの構築は困難を極めたが、運用を通しての作業効率は、従来の研究方法とは比較にならないほど有益であり、将来性の高い技術であることが感じられた。

例えば、運用の際、画像データをデータベースに貼り込む作業はコピー資料をはさみで切り、糊で貼り付ける作業に似ているが、比較にならないほど迅速に処理を行うことができた。原本において文字と文字が重なっているような場合においても、画像データの範囲を広く設定し、複写を繰り返すことで問題が解消された。はさみを入れる度に文字と文字の境界を定め、切り取った資料が復元できない従来の方法とは、大きな違いがある。こうした具体的な作業効率の向上は、データベース構築と情報処理技術の運用評価に関する筆頭として挙げられよう。

また、画像データのデータベース収録後は印刷を行い、コピーの切り貼りで字書を作成した場合との比較を行った。複製からの直接入力とは、コピー資料よりも精度が高いため、評価は良好である。データベースそのものを提示するのは容易なことではないが、印刷されたデータは作業の全体像を把握し、データ量を実感するのに有益である。巻一及び巻四の画像データ収録後、書風分析にあたり、登録件数の多い「漢字」順に並べることで、データベース収録文字の動向を掴んだ。

第六章の書風分析に関しては、データベース収録の画像データを

使用し、論述を行った。画像データを使用して論証したため、論述の根拠が明らかとなり、議論の対象を提示できたのではないかとと思われる。これは、資料の共有性を高め、書学をより開かれたものにしていく、新たな道標になると考える。

第六章 第三節 E『寿量品』に見られる異筆、三箇所相互関係、はデータベース運用の面から考えた場合、複数の項目に重複してデータを登録するものである。B、C、Dにそれぞれデータを登録し、それをまたEとして包括し、集合させる。従来の研究方法であれば、まず「漢字」ごとに集めて字書の形にまとめ、次にB、C、Dそれぞれを抜粋して表にし、更にEという違う観点から調査するためにまた集め直すという3回の手順を踏むことになる。その後、全体の形に戻すという試行錯誤を行うにはあまりにも作業が繁雑であり、資料の劣化は免れない。データベースにおいて、画像データは登録以降一括して管理されており、並べ替えの名称ごとに集合させ、その都度抽出を行う。データベース構築の計画段階から予想されたことではあるが、画像データの並べ替えは資料を劣化させず、作業効率を高めるという点において、書風分析のための環境を強力にサポートした。

「法華義疏画像データベース」を構築することで、以上のような有益な資料運用の成果が得られた。しかしこれは、運用というユーザの面から見た評価である。第三章で述べたように、本研究の「法華義疏画像データベース」は、書学における汎用性を目指したのではなく、『法華義疏』の異筆判断を目的としている。目的が達成されなければ、有効なツールとしては機能していないということになる。目的とは、『法華義疏』の異筆判断であり、データベースが具

体的ツールである以上、「法華義疏画像データベース」の真の評価は、本研究の異筆断定の評価と同義である。今後の本研究に対する評価の如何により、それを証明するために構築された「法華義疏画像データベース」の評価も決定されるものと考ええる。これが、第三章 第三節 (2)異筆断定のための「法華義疏画像データベース」構築、で述べたデータベース構築の意義に関する考察である。

そして更に言えば、それらを左右した最も重要な要点が、データベースの構築に伴う画像データの精度に関する問題である。

データベース構築を目指したことで、初めて画像データ化に対する試行錯誤が開始されたのであり、仮に、筑波大学附属図書館から複製貸出の許可が下りたとしても、画像データ化を視野に入れていなければ、結局、資料は複製からのコピー資料ということになる。

また、どれほど高精度の資料を入手しても、重複して資料を運用するような場合には、どちらか一方をコピー資料に複写するしかない。つまり、画像データ化を計画していなければ、何らかの形で、いずれはコピー資料を使わざるを得なくなるということである。それは、資料入手時の段階、字書製作の段階、論文執筆の段階、論文提示の段階、と様々に想定できるが、研究全体を通して、資料の精度を保つことが不可能となるのは必至である。その点において、画像データは、度重なる運用に耐え、どの場面においても変わらぬ精度を保つことができる。

資料の共有性は、実証的研究においては不可欠である。論拠となる資料の相違が、時に論証結果の違いとして反映されるためであり、有意義な議論を展開させるためにも、資料精度の高さは、欠くべからざる点である。本研究は画像データ化を行うことで資料精度を高

めたが、上述したように、データベースの構築以外に資料の精度を高める方法はない。データベース構築を目指したことで付随する技術の進行を促し、画像データの精度を高めたという点においてデータベースは研究環境を整備したと言える。

本研究におけるデータベース構築と画像データ化の具体的内容については、補論に論述し、その詳細を明らかにした。